東京学芸大学附属世田谷小学校研究紀要
No. 46　2014　P.P. 30～33

公開授業Ａ　１年１組　総合学習（国語的活動）

くじらぐものせかいであそぼう！

井上　陽童

１．本実践の主張

「学び続ける共同体」とは何か？一言で言えば，「チャレンジし続けることを面白がるクラス」ではないだろうか。もう少し詳しく言えば，「自分・自分達がチャレンジしたいことをもち続け，それを仲間と試行錯誤しながら実現させようとし続けるクラス」となる。我が１年１組は，そんなクラスに少しずつ成長してきた。いや，今も成長し続けている。そこで今回は，「くじらぐも」を学習材にして，「学び続ける共同体」の実現と一人一人の豊かな成長を目指す。

本実践は，「くじらぐも」という物語に出会った児童が，造形的活動から劇化の活動へとつながる一連の「読みの過程」を通して，一人一人自由にその世界で想像しながら遊ぶことで，文字通り「自分のくじらぐもの世界」を創り上げていく。さらに，個人で創る活動と仲間とともに創り上げる活動が交互に，あるいは複線的に行われることで，１年１組の「くじらぐもの世界」が豊かに広がっていくことをねらった実践である。

２．単元について

（１）この活動が目指すこと

①主体性・創造性を引き出す「くじらぐも」の魅力

「くじらぐも」は，１年２組の子どもたちが体操をしていると，空に大きなくじらの雲が現れて，彼等の体操の真似をするところから始まる。子どもたちが話しかけ，くじらぐもがそれに応えることをくりかえすうちにすっかりうれしくなった子どもたちは，くじらぐもに跳び乗ろうとする。そして，見事くじらぐもに跳び乗り空の旅へと出かけるのである。物語を読み進めていくうちに，読み手である我が１年１組の児童も主人公達に感情移入して，物語の世界へ入り込んでいくだろう。そして，様々なことを想像し実際に挑戦したくなるだろう。今回は，造形的活動と劇化を中心の活動に据える予定だが，おそらく，それ以外にも児童から新しいアイディアが次々に浮かんでくることが予想される。つまり，児童の主体性や創造性を生んでくれる可能性を「くじらぐも」は多分に含んでいるのである。

②学びの連続性・発展性

児童は，２学期に行った「１年１組版おおきなかぶの劇作り」で，物語の世界を想像しながら自分達で演じることが大好きになっている。したがって，造形的活動を通して，「くじらぐも」の世界を豊かに創造・想像し，一人一人の「くじらぐもの世界」が十分に描き出されたとき，おそらく児童は，「１年１組版くじらぐもの劇をやりたい！」と言い出すことが予想される。つまりこの活動は，１年１組のこれまでの学習履歴が生かされるとともに，さらに発展していく可能性をもっているのである。

（２）この活動のねらいと育てたい力

①「くじらぐもの世界で遊びたい！」という願いのもとに，自分達でアイディアを出し合い話し合いながら，くじらぐもの世界を創ったり劇化したりする活動を協力して実現させていく。

②造形的な活動や劇化などの様々な活動を通して，一人一人が「自分のくじらぐもの世界」を豊かに創造・想像しながら愉しむ。

（3）主張に迫る手立て

■3つの様相■

1．自分の語りを大切にする。

2．3つの「きく～聞く・聴く・訊く」を大切にする。

3．背景を考えながら，仲間とかかわろうとする。

本単元では，個から全体へと学びが大きく発展する場面が2回ある。

1回目は，2時間目から3時間目（※展開計画参照）にかけて。個人の造形的活動「くじらぐものお気に入りの場面を絵に描こう！」から，クラスみんなでの造形的活動「1年1組をくじらぐもの世界に模様替えしよう！」に移る場面である。今まで「自分のくじらぐもの世界」で愉しんでいた子どもたち。そこから全体での活動に移っていくことで，一人一人がもっていた「くじらぐも」観・「くじらぐもの世界」がさらに豊かになっていく。もちろん，引き続き個々の活動もきちんと保証されるからこそ，一人一人自分のアイデアをのびのびと語り，仲間もその意見を共感的に聴く場が生まれる。そうやって，クラスみんなでアイディアを共有し少しずつ形にしてくことで，「1年1組のくじらぐもの世界」が教室に生まれた時，児童はこの単元にさらに深く没入していくだろう。

2回目は，6時間目から7時間目（※展開計画参照）にかけて。それまで，造形的活動としては，クラスみんなでの「くじらぐもの世界」を創ってイメージを共有してきている。しかし，声に出して音読することに関しては，毎回の授業の冒頭と家庭学習で一人で読む活動が中心となっている。それが，6時間目に動作化をしながらみんなで音読した瞬間に，児童は「おおきなかぶ」で行った「仲間と声や動きを重ねながら想像を広げる愉しさ」を思い出すだろう。そしてその活動の過程で，友達の想像あふれる新しいせりふや動作に共感したり，友達のせりふに触発されて自分なりに新たなせりふや動作を考え出したりしていく。ここで教師は，これまで創り上げた個々の絵や町をふりかえらせたり個々の発想の根拠を問うたりすることで，クラス全体で発言者の背景を考えるような場も設定する。さらに，新しい活動のアイディアが出現する場として，一学期から子どもたちが活用してきた朝の会「○○しませんか？コーナー」が大いにその役割を果たす。そこでは特に，「自分の語りを大切にする」様相と，「3つの『聞く・聴く・訊く』を大切にする」様相が現れるだろう。

以上のような場面を学びが連続・発展する中で意図的に設定することで，3つの様相が随所に現れると考えている。そして，その様相を教師がていねいに見取りながら，一人一人がより豊かに想像・創造する学習を実現していきたい。

3．実践の概要

（1）動作化の過程で生まれる読みの深まり

2／1の研究発表会の次の時間である第12時間目に，「くじらぐもとおわかれするまでをみんなでやろう」というねらいで，その後の場面を動作化する時間をとった。すると，興味深い場面が2つあった。くじらぐもに乗って，子どもたちが学校に戻る場面を動作化した時のことである。ナレーター役の子が，「しばらくいくと，学校のやねが見えてきました。」と言うと，くじらぐもに乗った子どもたち役が，口々に自分が想像したせりふを言った。その後ふり返りをすると，Sさんが「さっきまで小さかった町が，あんなに大きくなった。」と自分の想像したせりふを発言した。「あ～，なるほど！」と納得の声が上がる。しかし，Kくんが「どうして，町が大きくなるの？」と尋ねたのである。すると，Yくんが「遠いと小さく見えるけど，近づくと大きく見えるってことじゃない？」と自分の解釈を説明したのである。私が，「Sさん，そういうこと？」と聞くと，「そう。」とうなずくSさん。Kくんは，Yくんの説明で納得したようであったが，ここで私がさらに1つ提案をした。「せっかくだから，実際にやってみようよ。みんな，くじらぐもに乗ったこどもたち役になってね。」と言って，全員を立たせた。そして，教室の後ろにあるくじらぐもから見える町の方を向かせる。「あの町の中の，Mさんが作った附属世田谷小学校を見ていてね。『では，かえろう。』とくじらぐもが言いました。すると，だんだん町が近づいて来る。世田谷小学校が近づいて来る。」と私が言うと，子ど

もたちはそろそろと町に向かって近づいていく。「あ，大きく見えてきた！」「本当だ！」最後はみんな顔の前までMさん作の世田谷小学校に近づいていた。1年1組で作ったくじらぐもの世界があったからこそ，動作化を通して実感を伴って深く作品世界を想像した瞬間であった。

その時間のもう1つの場面。「では，かえろう。」というせりふをくじらぐも役の子が言ったとき，誰かが「それは，先生のせりふじゃない？」と疑問のつぶやきをしたのである。そこで，私が「『では，かえろう。』はだれのせりふ？」と板書する。すると，ここでもYくんが，「くじらぐものせりふだと思う。だって，そのせりふの後に，『と，くじらはまわれ右をしました。』とあるから。」と根拠を交えて説明したのである。さらに，Rくんが意見を重ねる。「ぼくもくじらぐもだと思う。理由はこの前の場面でくじらぐもがこどもたちや先生を乗せて空の旅をしたんだから，帰ろうと言ったのもくじらぐもだと思う。」この2つの意見には，全員が深く納得した様子であった。会話文とその話し手の関係を根拠として説明したYくん。物語文の展開と登場人物の行動から想像したことを根拠として説明したRくん。2人の姿は，まさに動作化を通して深く読んでいたと言えるだろう。

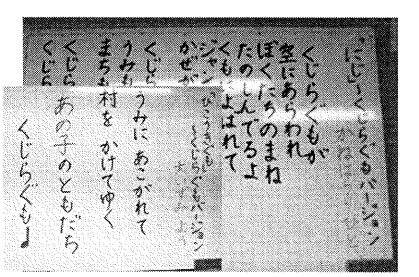
（2）劇化だからこそ生まれた，叙述を大切にする姿

劇をすることになって迎えた第15時間目，前時の学習感想で，Kくんが，「くじらぐもに乗るところを見せちゃいけないから，教室を真っ暗にする。」と書いていた。そこで，次の時間にその意図について尋ねると，「『天までとどけ，1，2，3.』の3回目の後，風が吹いてあっという間に子どもたちはくじらぐもに乗るんだから，くじらぐもに乗るときは電気を消す。」と説明したのである。つまり，“暗転”である。初めはKくんの提案の意図が分からず，けげんな表情をする子どもたち。そこで，私は黒板に「あっというまに」と本文の叙述を書き抜き，くじらぐもの背中に移動しようとする子ども役の絵を描いた。その上で，もう1度Kくんに説明してもらった。すると，意図が分かった子たちが「あ～！！」と納得の声を上げ，今度はその子達が説明を始めたのである。Kくんのアイディアは，物語で想像している世界と，実際に演じる状況を比較・検討しなければ浮かんでこないだろう。その想像力・発想力には感心するばかりであった。ところが，その日の学習感想で，さらに驚きのアイディアが飛び出す。Sくんの学習感想には，「Kくんが言うように，あっという間にくじらぐもの上に乗るためには，初めからくじらぐもに乗る子ども役と『天までとどけ。』をやる子ども役に分かれればいいと思う。」と書かれていたのである。Kくんが指摘した，くじらぐもに乗る場面のタイムラグを解決する見事なアイディアである。これには本当に驚いた。早速その次の時間に，彼に説明してもらった。子どもたちは，もちろん大賛成。「それいいねー！！」「先生，早くやろうよ！」と一気に劇に向けての気持ちが高まっていった。

（3）学級文化から生まれるアイディアの数々

児童の素敵なアイディアはさらに生まれてくる。ある日のRくんのあのね帳に，「『にじ』の歌で，くじらぐもばんを作りました。」と書かれていた。何かと思ったら，替え歌を作ってきていたのである。これを子どもたちに紹介したところ，「この歌は，劇の最後に歌うといいと思う。理由は，最後に『くじらぐもさん，ありがとう♪』とあるから。」という意見が出た。作詞者Rくんもにっこり。エンディングテーマ決定の瞬間である。

またある日。「海の方へ，村の方へ，町の方へ。みんなは歌を歌います。」の場面。その日の朝の会で歌っていた荒井由実の「ひこうきぐも」を替え歌にして，Yくんが歌い出した。すると，みんなで大笑い。挿入歌の誕生である。このように，学級文化であり学習履歴（1）でもある歌が，「くじらぐもの劇」をさらによいものにしていったのである。



(4) くじらぐもの劇発表！！

3月6日・7日の2日間。お相手さんである2年1組・6年1組・実習生の先生方・保護者・研究協力者である國學院大學の吉永安里先生など，たくさんのお客さんを招いて，子どもたちはくじらぐもの劇を上演した。結果は大成功。万雷の拍手に，児童も大満足の様子であった。そんな彼等に，私から1枚の手紙を読み聞かせた。手紙の差し出し人は中川李枝子さん。言わずと知れた，くじらぐもの作者である。実は，中川さんが本校と同じ世田谷区深沢在住ということを聞きつけ，劇をすることになった時に参観の依頼状を出していたのである。あいにくお忙しくて劇の参観は叶わなかったが，わざわざお手紙を書いてくださっていた。その手紙を読んだのだ。すると，手紙の文中で，40年以上前に「くじらぐも」の構想を練る際に本校の周りを取材された，というエピソードが載っていたのである。これには，児童もお客さんも大興奮。「じゃあ，あのお話の子どもは世田谷小の子かもしれないんだね！」という声も飛び出した。くじらぐもの世界で遊んできた1年1組にとって，最高のプレゼントとなった。

4．実践のふり返り（成果と課題）

①「遊ぶこと」＝「読むこと」

本単元の活動の2つのねらいが達成されたと感じている。特に，②のねらいは，協議会で議論になった，総合学習の国語的活動そのものであり，私は「読む」活動の1つの提案だったと考えている。指導案の学びの履歴や本稿でも書いたとおり，児童は，「絵を描きながら」「町を作りながら」「動作化しながら」「劇化の話し合いをしながら」，くじらぐもを“読んで”いたのである。そうやって様々な活動をしながら物語との距離を縮め，自分のくじらぐもの世界を創り出す。その一連の営みが，今回の「くじらぐものせかいであそぼう！」だったと考えている。

②学び続ける共同体として成長する1年1組

本単元で，学び続ける共同体に成長するための鍵となる3つの様相「1．自分の語りを大切にする。2．3つの『きく～聞く・聴く・訊く』を大切にする。3．背景を考えながら，なかまとかかわろうとする。」を，児童は数多く見せてくれた。友達に「よく分からない。」と言われても，あきらめずに自分のアイディアについて説明するKくん。Sさんの説明をよく聴き，Sさんに訊いてきた友達に本人に代わって説明するYくん。Kくんのアイディアをよく理解したからこそ，そこに新たなアイディアを付け加えたSくん。それらひとつひとつが，新たな原動力となりさらに豊かな学びへとつながっていった。

◇課題「子どもとともにつくる授業」の実現を目指して

協議会でも指摘されたが，教師が子どもの意見を解釈しすぎて，子どもの語るべき場面を奪っていたことが多々あった。その要因として，2点挙げられる。1点目は，教師が意図を強くもちすぎていたことである。もちろん，教師の出が必要なときは出るべきである。しかし，授業は子どもが主役である。子どもの願いや活動の流れを大切にしながら，教師の意図をその時間の活動や発問・板書に滑り込ませていく。そんなさりげない教師の出について，今後さらに学んでいきたい。2点目は，様相にもある「きくこと」を，教師がもっと大切にしていくことである。子どもたちがその時間で何を考え理解し共有しているかは，やはりその声をきかなければ分からない。「あなたは，どうしてそう思ったの？」「みんなは，どう思う？」教師が『きく』ことを大切にするからこそ，子どもたちも「きき合える」姿に育っていくのだろう。

5．参考文献

東京学芸大学附属世田谷小学校編『授業改革への道しるべ』東洋館出版社2005年　p176

田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力　小学校編1年』教育出版2001年

田近旬一著『読み手をそだてる－読者論から読書行為論へ－』明治図書1993年

中井孝章著『鬼ごっこのリアル　フェティシズムとしての「子どもの遊び」』三学出版2010年